

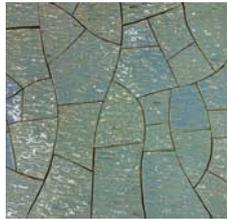


石岡市役所本庁舎1階ロビーに設置された「常世の国の太陽」(浦口雅行氏・2019年制作)

## 圧倒的に困難と言われる青磁技法を用いて制作された、巨大陶壁に込めた思い 石岡の未来を照らす「常世の国の太陽」

### 国内最大級にして最高峰の青磁作品

青磁とは、空の青とも、海の青とも形容される透明感のある青い磁器。この色を生み出すには、釉薬の調合や掛け具合、窯の中の酸素量の調整など、かなりの技術が必要で、陶磁器の中でも特別な存在です。



▲貫入(釉薬の表面に入るひび模様)を表現

2月25日、本庁舎1階ロビー上部に高さ1.74m・幅12.85mの青磁で作られた「太陽」が設置されました。制作したのは、市内在住の陶芸家、浦口雅行さん。東京芸術大学在学中から青磁に魅せられ、人間国宝の三浦小平二氏に師事。

卒業後は、栃木県内の鉱山会社で磁器の材料となる鉱物を採掘するなど、作家でありながら素材のことも熟知している稀有な存在。作品は、東京国立近代美術館や米・ニューオリンズ美術館にも所蔵され、世界で活躍されている陶芸家です。

### この作品で、子どもたちを照らしたい

「常陸風土記によると石岡市は、かつて日出る東の最も重要な国として、常陸国の国府が置かれ、ユートピアを意味する常世の国と呼ばれた場所。青磁陶板245枚の本作品は、地平線から昇る太陽が、石岡の未来を照らし続けることを願い制作しました」

石岡の風景に魅せられて、浦口さんが栃木県芳賀町から市内に移住したのは、2001年のこと。

「初めて訪れたその日に、直感で移住を決めました。今回、制作にあたり調べていくと、すごい場所だったのだと改めて実感しました。20年近く住んでいても、こんなに面白い人が住んでいたのかと驚きと発見の多いところです。この陶壁の前で、子どもたちが地域の方々から郷土の歴史を聞き、自分たちのふるさとに誇りを持つ、その瞬間を照らすことができたらという思いを込めています」



### 〔浦口雅行氏プロフィール〕

1964年東京都生まれ。87年東京芸術大学美術学部卒業、89年同大学院三浦小平二研究室修了。90年国際陶芸展優良入選、93年朝日陶芸展新人陶芸賞受賞、98年国際交流基金買上げ、04年ニューオリンズ美術館買上げ。日本橋三越、新宿京王、大阪高島屋、名古屋丸栄、広島天満屋などで個展開催。

### 日常を過ごす公共空間にアートを

行政の庁舎としてだけではなく、広く市民に開かれ、石岡らしさを庁舎から表現していくため、パブリックアートの公募を行い、浦口氏が作品を寄贈。趣旨に賛同した100人以上の支援者や企業の協力により、完成に至りました。

(本作の青磁陶壁の表面には、東日本大震災で破損した棚板の破片を用い、ひとつひとつ手作業で5万打の模様が打刻されています)